



生物多様性が農業にもたらす恵みを知る

本来の農地とは？

作物栽培のためだけでなく、多様な生物の住処でもあります。それらの生物は作物栽培においても多様な機能を果たしています。これらの関係性が良好に保たれているのが本来の農地だと考えます。

関係性が損なわれると、生物たちの重要性は顧みられなくなり、その多様性の損失は加速していきます。我々は生き物たちにもっと頼りたいものです。

日本国内外の有機農家さんと積極的に交流し、消え行く（かつては）身近だった生物の機能を検証し、農業への有効利用法について研究することで、これらの生物を改めて身近な存在になるような保全につなげていきます。



集落に分け入り、聞き取り調査をして消えゆく生物の行方を追う。（西部ジャワで循環社会型を維持しているカンブナ村にて現地大学と共同調査）



インドネシア在来種委員の卵塊。田んぼは真珠。減少して今では幻。雑草を良く食べ、イネは食べない、農家の味方。食べても美味しい。



インドネシアでも外来種のジャンボタニシの卵塊。どぎついピンク色。全土に蔓延し、イネを食害する。食べるも怖い。が美味しい。むしろ在来種より旨い。

消えゆく身近な生き物たちを保全して本来の農地の機能を取り戻したい

【担当】

名前：佐藤 智

専門分野：農業生態学

連絡先：

satorus@tds1.tr.yamagata-u.ac.jp